

前は「万物は御子によって造られ、御子のために造られました。」コロサイ 1:16 とあるようにイエス・キリストの素晴らしさを学びました。御子なるイエス・キリストは神であり、私たちが目にするものすべて御子のために造られたということは被造物すべてが創造主なる神様の素晴らしさを表しているということです。クリスチャンとなり、天地万物を神様が造られたことが分かったと見るもの、聞くものすべて新鮮な驚きが湧き上がってきたという証しはよく聞きます。私もそうでした。昨日も教会学校のサマースクールがあり、教会でのお話やニフレルに行って、動物や魚、鳥を見て神様の造られた世界のすばらしさを体験したことでした。

1) 和解とは神様との良い関係

このように、コロサイ人への手紙はイエス・キリストの素晴らしさをほめたたえています。イエス・キリストの素晴らしさは、イエスが神の御子、最高のお方、第一のお方であるということだけではありません。この神の御子が人となられたこと。すべてのものの造り主、創造主が、造られた者、被造物となってくださったこと。最高のお方が最低に貧しく、低くなってくださったこと。主であるべき第一のお方が、しもべとなってくださったこと。ここに素晴らしさがあり、驚きがあります。22 節に「御子の肉のからだにおいて」とあるように、神の御子は人となられました。そして、20 節に「その十字架の血によって」とあるように、そのからだから血を流し、その命を投げ出してくださいました。もし、イエス・キリストが人とならなければ、また、十字架の上で血を流して死んでくださらなければ、イエス・キリストがどんなに素晴らしいお方であったとしても、私たちは、イエス・キリストとは何の関係もありません。いや、関係がないどころか、私たちは、神の敵として神の裁きを受けて終わる者だったのです。それは私たちが何か悪いことをしたという自覚が無くてもです。それは丁度、法定相続人制度のようなものです。例えば親が大きな負債を負ったなら法律的にはその家族にも負債が降りかかってくるようなものです。エペソ人への手紙には次のように書かれています。「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり・・・かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」エペソ 2:1-3

人は生まれながらの罪人であり、神の敵であり、御怒りを受けるべき子らであるというのは、多くの人には受け入れにくい教えです。それよりも、人はみな善い性質を持って生まれて来る。そして何だって出来る。人はみな神の子であり、誰もが愛されるために生まれたのだという教えのほうが、人気があります。パウロはコロサイのクリスチャンに「あなたがたも、かつては神から離れ、敵意を抱き、悪い行いの中にありました」コロサイ 1:21 と書きましたが、そう書いたとき、「実は私もそうでした。私はあなたがたよりもっとキリストに敵対していました」と言いたかったと思います。ご承知のように、パウロは以前は、キリストに敵対し、教会を迫害した人でした。クリスチャンを捕まえては牢に入れていました。そしてパウロは、使徒になって、キリストのために大きな働きをした後も、ずっと自分がキリストの敵であったことを忘れないでいました。

そうしたパウロについて、「パウロのようにいつまでも過去にとらわれているのは良くない。クリスチャンになったのだからもっと前向きで積極的な物の考え方をしなければならぬ」と批評する人たちもいますが、その批評は的を得ていません。パウロは自分の過去にとらわれて罪悪感や自己憐憫にひたっていたわけではありません。そうではなくて罪を赦し、和解を与えてくださった、神の大きなあわれみ、恵みをほめたたえるために、自分の過去を覚えていたのです。自分の過去を見つめることは、決して消極

的、後ろ向きなことでも、マイナスなことでもありません。それをごまかさず、それに向き合うことによって神の恵みを覚えることができるのです。クリスチャンとは赦され続けてゆく罪びとにすぎません。

その意味において私たちが信仰が与えられ、救われた時のことを思い起こすことは大切なことです。つまりクリスチャンになっていなかったら自分はどんな人間であっただろうかと思いを馳せることです。自分の悲惨で醜い姿、強がりながらも嫉妬に燃え、少しけなされたら怒りに燃え、プライドが傷つけられたと自分の全存在が否定されたように受け止め、落ち込み、少し褒められたら、まるで世界は自分の思い通りになるかのように思い込むような自分の姿があるかもしれません。神の憐れみによって救われていなかったらどんな人間になっていたのか？ 私なんかも鼻もちならない頑固で嫌味な人間であったと思います。だからと言ってクリスチャンになったのですっかり変わったわけではありません。ただ罪が示され、神に赦していただきながら少しは変えていただけたような気がします。ですからキリストの恵みを思い起こすためにも自分の過去を思い起こすことは意味のあることです。思い起こす時にすべては神様の憐れみのゆえにここまで来たことを思い起こすのです。私たちも、聖書が教えるように、素直に神との和解が必要なことを認めたいと思うのです。

2) 特別な和解

ほんらい「和解」というものは、損害を与えた人のほうから損害を受けた人に対して「ごめんなさい」とお詫びをし、償いをし、赦しを請い、仲直りを願い出るものです。罪は人を傷つけ、社会を傷つけ、罪を犯しているその人自身を傷つけるばかりでなく、神の栄光や栄誉を傷つけるものです。ですからほんとうは、人間の側から神に和解を申し出て当然なのですが、残念ながら、人間はそれほど素直ではありません。自分がこんなひどい目にあったのは両親が悪いから、教師が悪いから、上司が悪いから、夫が、妻が悪いからなどと、まわりの人のせいにしてたり、ひいては、神のせいにしてしまう、それが人間の罪深さであるように思います。

しかし、神は、そんな頑固な人間に対しても、ご自分のほうから和解の手を差しのばしてくださいました。アダムが罪を犯して、神の目から隠れようとしたとき、神はアダムに「あなたはどこにいるのか」(創世記 3:9) と呼びかけられました。ご自分の民として選んだイスラエルが、神から離れて行ったときも、神はイスラエルに「背信の子らよ。帰れ。わたしがあなたがたの背信を癒そう」(エレミヤ書 3:22) と語りかけてくださいました。イスラエルは自分からまことの神を捨て、偶像の神々を礼拝し、それに従いました。そしてその結果、様々な災いにあいました。いわば自業自得、自ら蒔いたものを刈り取っているのですが、それでも、神はイスラエルが苦しむときには、心を痛み、イスラエルと共に苦しみ、イエスラエルをあわれみ、イスラエルに手を差しのべ続けてこられました。それこそお人よしにもほどがあります。

そして、最後に神は、ご自分の御子を世に遣わしてくださいました。キリストは罪ある人間が聖なる神と和解することができるために、ご自分のいのちを私たちの犯した罪の償いとし、私たちが神に対して支払わなければならないもののすべてを支払ってくださいました。22 節に「神が御子の肉のからだにおいて、その死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。あなたがたを聖なる者、傷のない者、責められるところのない者として御前に立たせるためです。」とあります。

もしも神様が「もういい。今までのことは赦してやろう。その代わり、金輪際、私の前に姿をあらわすな。」と言われたらどうでしょうか？ 罪は赦されています。しかし、きずなは無いままです。神様は違います。「あなたが赦されるために払わなければならない罰は私を受けておきました。ですからこれを受け取りなさい。いや受け取って欲しいのです。私はこれからいつも共にいるから、何かあったらいつでも

も私のところに来なさい！と呼びかけてくださっているのです。和解とは神との良い関係をもって生きるということです。

今日の裁判では、和解のために多額の「和解金」を用意しなければならないことがあります。しかも和解金は賠償金とは別のもので、もし、神が人に和解のための支払いを要求されるとしたら、いったい誰がそれを支払うことができるのでしょうか。私たちが神に与えた損害は計りしれないものであり、それは私たちの何によっても償うことは出来ません。償おうとすればするほど償えないものがますます増えるばかりです。それができるのはただひとり、イエス・キリストのみです。そして、イエスはそれを十字架の上で成し遂げてくださいました。和解のためのすべての道筋は、神が備え、キリストが成し遂げてくださったのです。私たちはただそれを受け取るだけです。神との和解を受け入れ、和解の実である神との平和、神からの平安を、信仰によって受け取るだけなのです。

3) 和解の伝え手としての私たち

では、神が御子によって和解させてくださったのは、人間だけでしょうか。いいえ、20節の後半に「地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださった」とあるように、神は「万物」をも、キリストにあって和解させてくださったと教えられています。キリストは、キリストを信じ、キリストに従ってきた者たちに栄光をお与えになる時に、被造物をも、その栄光にあずからせてくださいます。すべての被造物、万物が、新しい秩序の中に入るその時を、私たちも待ち望んでいます。

イエス・キリストによる「和解」、それはなんと素晴らしいことでしょうか。それは、私たちと神との関係、私たちと他の人との関係を変えるばかりか、私たちとこの世界との関係をも変えるものなのです。やがて来る日の栄光は想像することができないほど素晴らしいものですが、その素晴らしさの一部は、今でも、味わうことができます。それは、イエス・キリストが十字架の血で作ってくださった平和、平安を受けることによってです。20節に「その十字架の血によって平和をもたらし」とあるように、和解の実、結果は神との平和、イエス・キリストにある平安です。それは、この世が決して与えることのできないもの、人の力では作り出すことのできないものです。今日の社会は競争社会です。現代は不安な時代です。誰もが平和を求め、平安に飢え渴いているのに、それが得られないでいます。なぜでしょうか。神との和解が成立していないからです。ほんとうの平和、平安は神との和解からしかやってきません。ほんとうの平和、平安を得るために、神との和解を自分のものとしましょう。

パウロはコリント第二 5:18-20 でこう言っています。「神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。」「神が私たちを通して勧めておられる」とは新改訳第三版では「神が懇願しておられる」となっています。神は主権者ですから、私たちに命令すればそれで良いのに、「お願いだから、和解を受け入れて欲しい。十字架の愛を受け取ってほしい」とでも言うように、それを勧めておられるというのです。そうした神の熱い心を知るなら、誰がそれに応えずにいられるのでしょうか。この日、神の懇願に答え、キリストが備えてくださった和解を、信仰をもって受け取ろうではありませんか。しっかりと受け取ることが和解の務めを与えられた者が第一にすべきことなのです。祈ります。

(祈り)

あわれみ深い神さま。私たちは自分の罪の大きさ、深さを思うとき、同時に、あなたの恵みの大きさ、あわれみの深さをほめたたえずにはおれません。あなたが、あなたに背を向けて遠く離れていた私たち、いや、あなたの敵でさえあった私たちに、和解の手を差しのばしてくださったことを感謝します。あなたが備えてくださった和解を受け入れ、和解の結果である平安と平和を豊かに受け取ることができる私たちとしてください。恵み深い主、イエス・キリストによって祈ります。